

[分類]	普及技術
[成果名]	アンズかいよう病防除にスターナ水和剤が有効である
[要約]	アンズかいよう病防除にスターナ水和剤の 1,000 倍液を散布する。
[担当]	果樹試験場環境部
[部会]	病虫部会

1 背景・ねらい

近年、アンズかいよう病の被害が増加している。平成 24 年には開花期以降の防除で使用できる薬剤として、チウラムフロアブルおよびエコショットの 2 剤を普及技術とした。しかし、本病の防除期間は展葉初期から収穫期まで長期に及ぶため、さらなる防除薬剤の充実が必要である。そこで、平成 21 年、22 年にスターナ水和剤について、アンズかいよう病に対する防除効果および薬害の有無を検討し、平成 24 年 12 月に農薬登録されたため、今回普及技術とした。

2 成果の内容・特徴

(1) アンズかいよう病防除にスターナ水和剤の 1,000 倍液を散布する。

農薬登録内容

スターナ水和剤

[一般名及び成分含有量] オキシリニック酸 20.0% (FRAC コード^注):31

[毒性] 人畜毒性：毒物、劇物には該当しない

[魚毒性] A 類

[対象作物に対する適用登録状況（平成 25 年 9 月 15 日現在 JPP-NET 確認）]

作物名	適用病害虫	希釈倍数	散布液量	使用時期	使用回数	使用方法	オキシリニック酸を含む農薬の総使用回数
小粒核果類	かいよう病	1,000	200～700L/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内	散布	3 回

注) FRAC コードとは FRAC (殺菌剤耐性菌対策委員会) が定める殺菌剤の作用機構による分類で、同じコードは同一系統を表す。詳細は Japan FRAC のホームページ (<http://www.jfrac.com/>) を参照する。

3 利用上の留意点

- (1) かいよう病防除では、薬剤防除だけでなく伝染源となる枝病斑の剪除、防風対策を総合的に実施することが重要である。
- (2) 本病の防除では発病前からの予防的散布が基本となる。
- (3) スターナ水和剤に関する注意事項
 - ア 耐性菌の出現を回避するため、本剤の過度の連用を避ける。
 - イ あんずでの使用は小粒核果類かいよう病に対する適用登録による。
 - ウ 多発生条件下では効果が劣る事例がみられるので注意する。

4 対象範囲

県下全域

5 具体的データ

- (1) スターナ水和剤のアンズかいよう病に対する防除効果および薬害の検討
 - ア 平成 21 年には果樹試験場ほ場で接種条件下で試験を行った(表 1)。スターナ水和剤の 1,000 倍液は多発生条件下の試験において、無処理と比べ防除効果が認められた。薬害および果実に対する汚れの発生は認められなかった。

表1 アンズかいよう病に対するスターナ水和剤の防除効果（平成21年、果樹試験場）

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	防除価 ^{a)}	薬害	汚れ(果実) ^{b)}
スターナ水和剤	1,000	311.0	38.3	43.7	なし	—
無処理	—	328.0	68.0			

a) 防除価=100- (処理区の発病葉率/無処理区の発病葉率) ×100

b) —: 散布薬液による汚れの発生なし, ±: 軽微な汚れの発生あり (実用上問題なし), +: 実用上問題となる程度の汚れあり

試験場所: 須坂市果樹試験場内ほ場 (接種試験)。発生状況: 多発生。供試品種: 「信陽」(約12~16年生)。

試験規模: 1区1主枝、2反復。

薬剤処理: 平成21年6月16日および7月5日および7月25日の計3回、動力噴霧器で十分量を散布した。

菌の接種: 平成21年7月1日および7月27日の降雨時に、当场保存のかいよう病菌の細菌懸濁液(濃度約 1×10^7 cfu/ml)を動力噴霧器で全区に噴霧接種した。

調査: 平成21年8月1日に1区当たり16~20新梢の展開葉全葉について発病の有無を調査した。薬害の発生の有無については随時、観察調査した。

イ 平成22年には果樹試験場内ほ場で試験を行った(表2)。スターナ水和剤の1,000倍液は中発生条件下の試験において、無処理と比べ高い防除効果が認められた。果実における汚れ、薬害の発生は認められなかった。

表2 アンズかいよう病に対するスターナ水和剤の防除効果（平成22年、果樹試験場）

供試薬剤	希釈倍数	新梢調査			果実調査			薬害	汚れ ^{b)} (果実)
		調査葉数	発病葉率 (%)	防除価 ^{a)}	調査果数	発病果率 (%)	防除価 ^{a)}		
スターナ水和剤	1,000	252.5	8.8	64.2	30.0	5.0	75.0	なし	—
無処理	—	278.5	24.6		30.0	20.0			

a) 防除価=100- (処理区の発病葉率または発病果率/無処理区の発病葉率または発病果率) ×100

b) —: 散布薬液による汚れの発生なし, ±: 軽微な汚れの発生あり (実用上問題なし), +: 実用上問題となる程度の汚れあり

試験場所: 須坂市果樹試験場内ほ場。発生状況: 中発生。供試品種: 「信陽」(約13~17年生)。

試験規模: 1区1主枝、2反復。

薬剤処理: 平成22年5月6日および5月18日の計2回、動力噴霧器で十分量を散布した。

調査: 平成22年6月12日に1区当たり20新梢の展開葉全葉および30果について、発病の有無を調査した。また果実に対する汚れの発生状況を観察調査した。薬害の発生の有無については随時、観察調査した。

6 特記事項

[公開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の病害虫に関する素材開発研究、平成20~24年度(2008~2012年度)、県単素材開発